

役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ (H30/11)

「負けん氣と根氣と慈悲」 ①突破口は巡回

石岡日養上人が昭和五十五年に名古屋建國寺の役中教養会でお話しされた「負けん氣と根氣と慈悲」と題した講話から、役中のご奉公のポイントを学ばせていただきます。

▼石岡上人が札幌に赴任された昭和十八年頃、教化を勧めると「種がない」と返される。ご奉公を勧めてもしようとしなさい。と言うのも、当時の人口二十万程の札幌は、男性は夏は出稼ぎで留守、冬は仕事がないので麻雀やパチンコに熱中してお金を使い果たすという生活で、コツコツご弘通に努める習性がない。「私は着任早々、こんなありさまに直面して困り果てました。そのうち戦争も深刻になり、男はほとんどいなくなってご婦人ばかり。ますます困難が加わってくるのでした」と仰せです……大寺院に成長するお寺は、お教務やご信者の意識も高く、皆が積極的に功德を積み、ご弘通を競う空気があります。その最高峰の戦前の乗泉寺で活躍された石岡上人が、怠惰な生活に馴れた赴任地の様子にショックを受けられることからお話しが始まります。つまり、ここで愚痴を言っておきられないのがご弘通の端緒と教えておられるのです。当時の家族の要の男性信徒を重視されるのもポイントです。

▼「それでも毎日お助行で、夜半に至るまで回り続けました。とにかく信者さんに出会うことが大変で、出会ったら決して離さない。それこそ一本勝負といった気構えでお折伏をさせてもらう。その人がウンと言って納得するまで座り込んでコンコンと折伏するのですが、それは大変な根氣の要ることでした」……「皆のやる気がないのでご奉公がない」と大事なご奉公の時間を無駄にしてはダメです。「ご奉公がないので遊びに行こう」「やることがないからテレビでも見よう」ではご弘通ができません。「時間があるなら巡回をせよ」と仰せで、それは相手がいるかないかに関わらず、とにかく動くことから始まるのです。相手がいれば、根負けせずに粘り強く御法の有難さをお話する、それが札幌弘通の原点でした。

▼「当時、そんな人たちが二十軒ほどありました。とにかく当初は、私がお助行に参っても家へ上げてくれず、へんな有難くない信心はやめた。御本尊を持って帰ってくれ」と言い出す始末です。そこで私はへんな有難い御法には滅多にお出合いできない。それをやめるなんて勿体ない。ご利益をいただいて、有難いと分かってから、嫌ならやめなさい……と粘って粘っても、なかなかその家の御宝前に上げてもらえない。こんな状態が、札幌にご奉公にあがった当時のありさまでした」……ご赴任当初、こうした巡回の対象にされていたご信者が二十軒と言いますから、今の組長さんのご奉公には大いに参考になります。信者とは名ばかりで、御宝前へのご挨拶も叶わない。そんなお家に何度も足を運び、顔を合わせるとご信心を勧め……。相手が「やめる」と言うのは、相当にしつこく訪ねられたのでしよう。ただ、「やめる」と言われるのも勧める糸口で、「やめても結構だから、その前にご利益をいただいてみよう」と食い下がる……。まさに「負けん氣と根氣と慈悲」の執念を感じます。

▼東京とはまったく違う冬の厳しさにも耐えながら、「馴れないもので辛かったですですが頑張って、とにかく札幌の皆さんが出稼ぎに出ないで市内で年中、無事に生活が出来るようにと御宝前にお願ひし続けました」と、ご祈願と巡回を続けられるのです……ご信心が出来るきつかけは、切羽詰まった状態と同時に、生活の安定が必要な場合もあります。そんな、ご信心の出来る環境が整うようご祈願しつつ、個別に根氣よく働きかけをされた石岡上人。過酷なご奉公環境に悲観せず、御法にお縋りして出来る努力を惜しまない姿勢が大事です。

【御教歌】 今こそはうききあらしに吹かるれど 花さく春をたのしみにして

役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ (H30/12)

「負けん氣と根氣と慈悲」 ② 本山初灯明料

石岡日養上人が昭和五十五年に名古屋建國寺の役中教養会でお話しされた「負けん氣と根氣と慈悲」と題した講話から、役中のご奉公のポイントを学ばせていただきます。

▼昭和二十一年、本山初灯明料が始まりました。札幌のご信者に納得してもらったのが、容易ではありませんでした。それというのも、本山に参詣したことがない。本寺の東京乗泉寺すらお参りしたことがない。津軽海峡を渡って、向こうの本土、京都まではたいへん遠くに思えて、話してもピンとこない……本山の御宝前に、一年の最初に使うお金を御供させていただく本山初灯明料は、お初穂という意味でも、灯明の供養という意味でも、大きな功德を生むご奉公です。現証も速やかで、一年間の身体健全と経済安定を願って奉納される方も多く、更に日々のお初を積立てて大功徳を得る人もいます。しかも、本山に奉納された浄財は宗門や支庁・布教区の弘通活動に使われますから、こんな結構な功德行はありません。ただ、本山を知らない人が喜んで納めるのは難しい。ここが根氣の要るところです。

▼よほど根氣よく話さないと分かってもらえない。「幹を良くすれば枝もだんだん茂って良くなる」と言っても理解が薄い。「源(みなもと)から発して東京乗泉寺が出来、それから札幌の妙証協会(信広寺の前身)になったんだ」、「元を忘れてはダメ。本山のお祖師さまにお供えすれば、こちらでも利益がいただけて結構になる」と説明しますが、どうも当初はピンとこない。なので、何回も繰り返して話しました……本山宥清寺のお祖師さまは、高祖日蓮大士が弘安三年にご自身の命を吹き込んで御開眼された御霊像です。ゆえに靈驗あらたかと開導聖人も仰せです。全国の寺院のお祖師さまは、この御霊像の分身で、そこから更に各家庭のお祖師さまが開眼され、私たちが日常のお給仕をさせていただきます。ですから、本山初灯明料は年に一度、元のお祖師さまにお給仕する意味もあります。元を大事にするご信心で、枝葉の私たちも功德をいただき榮えます。この理屈を、根氣よく教えるのです。

▼その当時の札幌のお寺は沼地にありました。六尺の丸太棒を立てて、その上に建物がある。冬になると、凍って本堂が浮いてしまう。春になると周りから氷が解けて、本堂の真ん中だけが高くなり、ちよつとカマボコ型になる。「馬の背のようなこの本堂を、どうするんですか。お金を本山に差し出して、どうするんですか。ねえ、お講師さん」とくる。役中会議を開くと、このように私は吊り上げのようになります……お金は誰もが大事ですから、どうせ出すなら自分のために使いたいと思うのは普通です。御有志も同じ。我がお寺にエレベーターがつく、駐車場が広がる等、自身も恩恵があるなら仕方なく出しても、自分はボロを纏って堪えながら、よそに気持ちよく財を出すのは理屈に合いません。そこで凡夫の理をかざし、反論して吊り上げる……。そんな、本山のお祖師さまも宗門の弘通も見えない人の気持ちをよく理解して、辛抱強く教えるのがご信心の理屈、功德の積み方なのです。

▼そういう人々に、本山初灯明料と言っても受け付けてくれません。私は一人ひとりコンコンと説き続け、ようやく戦後再開された本山初灯明料として、当時のお金で十万円をおあげさせていただくまでに漕ぎつけました……ご信心の考え方を教えずに、お金を預かるだけではご奉公になりません。集金をしてまとまった金額を整える以上に、功德の積み方を丁寧に教え、財に「思い」を込めて功德化させることが大切なのです。石岡上人が効率よく集めるのではなく、功德行の分からない人に、一人ひとりコンコンと説かれた所以です。

【御教歌】 御初穂は第六天に奉り 仏に上げる己が残物

役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ (H31/1)

「負けん気と根気と慈悲」 ③朝参詣を勧める

石岡日養上人が昭和五十五年に名古屋建國寺の役中教養会でお話しされた「負けん気と根気と慈悲」と題した講話から、役中のご奉公のポイントを学ばせていただきます。

▼「電車賃をくれたら参詣してやる」という観念を除くのはたいへんでした。私はまず、どうして切り替えたかと申しますと、「毎日、朝参詣をなさい」と教えますが、「子どもが学校に行く朝の支度で参れない」と婦人たちは必ず言う。「そうですか。それなら昼間でもよろしい。昼が都合悪ければ夜でもよろしい。門だけは開けときます。ただし、玄関は用心のために締め切っています」と……喜んで本堂のお祖師さまにご参詣できる心が育てば、妙法のご利益は手中となり、どんどん罪障を滅して菩薩に成長します。私たちは、そんな信心前を目指すのですが、最初はきつかけが難しい。実際、頼まれて渋々参る人も多くいます。「そんなに言うなら足代を出せ」「暇が出来れば行つてあげる」等々も、これは普通の観念です。そこで根負けせず、相手の参れる形を探して、お寺参詣ができるように導くのです。

▼そういう訳で、「一日一遍はお寺の土を踏んだだけでご利益がいただける」とご参詣の功德を教えました。そうすると、朝は参られぬ人がポツポツ昼夜いずれかに参詣してくるようになってきました。とにかく、「お寺の土を踏んだだけで違う。お寺は宝の山ですよ」ということ、それは皆さんにはよくお分かりのことですが、私は札幌で、このようにして教え続けてきたのです……「なぜお寺参詣が大事か」「家でもお看経はできる」と言う人に、開導聖人は「確かに即是道場だが、家は気が散るだろう?」(S/333)と教えています。生活の家の家庭と、皆が功德行のためだけに訪れる弘通の道場のお寺は、場所そのものの功德化がまったく違い、ゆえにお寺は聖地です。それを「お寺は皆の功德の溢れる宝の山」「足を一步踏み入れただけで功德に染まる」と平易に教えて、お寺参詣の有難さを定着させたのです。

▼日参できるようになると朝参詣を勧める。段々出来るようになったら次は開門参詣を勧め、それも出来るようになりました。朝の五時半、冬期は雪の中を参詣してくるのは命懸けです。三里、十二キロの道は、途中、足元に何が隠されているか分からない。胸まである積雪の中を来るのですから、本土の人たちには想像もつきかねる大変なことです。今日では中学生や高校生の若い人も、五時半に氷点下二十度の雪の中を漕いでやってくる。そして玄関で、参詣者の戸数を調べて統計を取るなど、熱心なご奉公をしてくれるようになりました……札幌の寒中の開門参詣は有名です。老若男女が励むその信心前は、他の追随を許しません。しかし、それは最初からそうだったのではなく、負けん気と根気と慈悲の結果と仰せです。

▼開門参詣には必ず「ご利益談を発表する。三百六十五日、毎日各教区一人ずつ欠かさずやる。十年間で三千六百五十人です。新しいのがないと昔のでも良い。ご利益談をまとめておくと、札幌信廣寺の弘通史にもなり、テープに録っておくのです。御法門は「またか」と帰る人もあるけれど、ご利益談は皆耳を傾ける。教化の話など綴ってビラにして「読んでください」と渡してもまず読んでくれない。読んで感心して「入信させてください」と申し出る人はありません(略)なんと言つても「私がご利益をいただきました」と知らずのが一番強く、効果があるのです……体験発表は大事です。自身のご信心を見直し、その喜びを再認識して他に伝える工夫をする……それはまさに法華経の説く菩薩の転教で、大功德を蒙ります。ご信心を表現する力が育てば、それが弘通力となります。そこに気付かせるのも根気です。

【御教歌】 信心のあるとなしとは参詣を するとせんとに頼れにけり



役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ (H31/2)

「負けん氣と根氣と慈悲」 ④折伏は思い切り

石岡日養上人が昭和五十五年に名古屋建國寺の役中教養会でお話しされた「負けん氣と根氣と慈悲」と題した講話から、役中のご奉公のポイントを学ばせていただきます。

▼初めて御講が動まりました。庭田儀一さんのお宅で、「うちの家内が、今度来たお教務さんの顔を見て死にたいと申すから、顔を見せに来てくれ」と言うのです。ようござんす、と私は行きました。家に着くなり三十分のお看経をいただき、よく見ると奥さんは御宝前の真向かいに布団を積み重ねて寝ている。三年寝たきりで、病院では手の施しようがないと言った。身体中が病氣の巢で、声は出ないし飯も通らないという。驚きました。さて皆さん、こんな状態の病人を、どうやってお折伏しますか……普通にご奉公できる人がない土地に赴任して、やっとお講が勤まったのは、瀕死のご信者のお宅でした。もちろん昭和十八年頃の北海道の医療環境は現代とは雲泥でしょうが、それでも病院が見放した三年も寝たきりの人を御題目で救うのは覚悟が要ります。しかも御法を信じる決心などない人が相手です。

▼私はズバリ、本人(庭田マサノさん)に対し、「明朝から朝参りしなさい」と、寝たきりで歩けないのを承知で折伏したのです。病人の返事は「朝参りしたら死んでしまいますよ」と。自分は死ぬんだから、どんな坊さんが葬式してくれるか、顔を見て死にたいと言った人が、朝参りせよと言うと、参ったら死ぬと言うのだから、どうやら死にたくないらしい。「死にたい」「死ぬ」と言う人は、本当は死にたくないもの。ここですよ、本心は。折伏はここをはずしたら役に立たない……一見、無茶な折伏のようですが、相手がすっかり諦めて氣力をなくしているのか、それとも「助かりたい」という思いがあるのかを見極められているのでしょうか。助かりたいと本気で思えば、人は藁をも縋ります。御法を信じて腹を括ることもできるはず。折伏は、そんな相手の本心を見切って思い切りよくせよと仰せなのです。

▼直入法華折伏宗ですから、ズバリ「御利益が欲しかったら、死にたくなかつたらお寺に来い」と申したのです。お寺は宝の山ですから、どんなご利益もいただけるのですから、思い切つて折伏せねばなりません。庭田さん宅では、お葬式の準備がしてありました。そんな状態の病人に対して朝参りなさいとは、なかなか申せるものではありませんが、ここが大事なところですよ……折伏は回りくどく言わず、直ちにご信心に入れるようストレートにするのがお祖師さまのご流儀で、それを直入法華折伏宗と言います。ご利益感得には、「御法を信じさせていただくこう」という決心を即座に行動に移し、具体的に罪障消滅できるようなズバツと改良点を示すことが大事ですが、朝参詣を勧められたのは、それが功德行の要素溢れる信行であると同時に、そこに絶対の信念を持つてご奉公されていたことが窺えます。

▼ところが私の折伏を素直に聞いて、死にたくないと思つたのか、その翌朝、マサノさんはご主人につかまってバスに乗り、途中二十二回も休憩して、とにかくお寺へお参りに来ました。そして「お寺に着いたら、生きて帰宅できない覚悟で来ました」と申すのです。ところがなんと一週間続けて参詣し、御題目をおあげし続けたところ、死ぬどころか一人でお参りできるようになったのです……ご信心の筋を通された折伏ですが、それでも葬儀の準備までしていた庭田マサノさんが「死んでもいいからお寺参詣をしてみよう」と決定し、それを家族も理解してサポートしたのは、どうしてもご利益をただかせたいと思う石岡上人の迫力が相手に伝わったからです。理屈は通つても、それだけで人は動かないものです。

【御教歌】 世の医者死ぬと定めし病人が なほるを見ても妙法としれ

役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ (H31/3)

「負けん気と根気と慈悲」 ⑤トイレ掃除

石岡日養上人が昭和五十五年に名古屋建國寺の役中教養会でお話しされた「負けん気と根気と慈悲」と題した講話から、役中のご奉公のポイントを学ばせていただきます。

▼(寝たきりで死にかけていた庭田マサノさんが一人でお寺参詣できるまでになって…)そこで「お講師さん、私に何か」「奉公を与えてくれ」と言うのでした。「うーんと功徳を積めるご奉公の場を教えてあげよう。まずトイレの掃除をなささい。貴女は身体中が罪障の巢みたいなものなんだから、病即消滅のためにはお便所の掃除が一番、功徳が深い」と教えたのでした…。ご利益を得た喜びのあるうちに、功徳の積み方を教え、ご奉公で罪障消滅することを覚えさせるのは育成の基本です。石岡上人は、深い罪障で苦しむ庭田さんに、トイレ掃除を勧めました。なぜか。そもそも身を勞し、心を尽くすほど功徳は深くなりますから、皆が嫌がる場所を喜んですれば、心を尽くす修行には最適です。当時のトイレは水洗ではありません。今のトイレ掃除より、何倍も大きな功徳がいただけただけなのは間違いありません。

▼私も乗泉寺に見習いに入ったとき、一番初めに教えられたのが、この便所掃除だったのです。次に本堂の掃き掃除。お内陣までさせていただくの二十年はかかる。段階があつて、土台づくりはまず便所掃除ですから。こうやって庭田マサノさんは全快しました。そして三十六年も延命のお計らいをいただきました…。お掃除は、仏教では昔から基本の修行です。それは、汚れた場所を綺麗にする作業ではなく、心を磨くためです。ゆえに家の御宝前も、汚れてなくても毎日お磨きをしてお給仕します。お寺は、境内地すべてが御法さまのために整えられた場所ですから、どこをお掃除しても御法さまにお仕えし、心を磨く功徳行となつて、罪障の消滅ができます。最も大変な場所で修行の基礎を固め、御法さまにお仕えする信心がちゃんと出来てからでないと、ご内陣のお掃除は出来ないぞと仰せです。御会式前の大掃除や連合の清掃当番も、組内信徒にそんな罪滅の功徳行を勧めましょう。

▼次に私は、全快の喜びで教化をなささいと教えたら、この人、なんとその年に五十一戸の教化が出来たのです。奉安教化ですよ。これは本山からも賞状をいただいています。葬式の準備をしていた人が全快したのですから、こんな有難い信心はない。この現証を目の当たりにして、みんなご奉公に馬力がかかったのも当たり前でしょう…。お教化が出来る秘訣は、口唱の経力をいただくことと、ご利益の喜びです。お看經の足りない人は、自力でご弘通をしますので、かなり努力が要ります。ご信心の喜びや御題目の有難さを知らない人は、他人に勧める勇気を欠きますし、勧める言葉に力がないので、相手の心に響きません。五十一個もの奉安教化をされた庭田さんの事例は、現証を得た喜びの大きさを伝えます。周囲に勇気を与えたのも大功徳で、もとはお寺参詣と、教化を勧めた石岡上人の言葉です。

▼教化のための朝参りだから御利益が顕れる。死ぬ人が治る。教化できますようにと祈願すれば、成功せんという事は絶対にない。はっきり言えることです。ご信者は、正直素直にその教えを知らねばならないのです…。朝参詣は「ご弘通の祈り場と心得よ」と仰せです。朝一番にお寺の御宝前にお参りする朝参詣は、あらゆる功徳行が凝縮されたご利益の早道です。時間のお初を供えて大きな声で口唱をし、御法門を聴聞してご祈願やご回向もし、油花料等の御有志も供えてお掃除等のご奉公に勤めれば、日々の罪滅は確実です。ただし、それを何のためにするかが大事です。お教化ご弘通のための朝参詣に励むのが菩薩です。

【御教歌】 弘めむとおもふ心の一筋に お唱へ申せ妙法の五字

役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ (H31/4)

「負けん気と根気と慈悲」 ⑥ 巡回助行

石岡日養上人が昭和五十五年に名古屋建國寺の役中教養会でお話しされた「負けん気と根気と慈悲」と題した講話から、役中のご奉公のポイントを学ばせていただきます。

▼私は東京乗泉寺でのご奉公体験で、相当鍛えられてきましたから、少々の苦勞は我慢できます。お助行だって、東京で平均一日十軒が水準でした。多い人は一日二十軒というのもありましたが、その日のうちに助行報告。行った家の名と、それぞれの状況報告をお師匠さまに提出する。横着して遊ぶわけにいかない。報告を出さないと「君、何をしていたの」とすぐバテしてしまう……ご弘通が爆発的に伸びた、戦前の乗泉寺のご奉公の様子です。巡回助行は日歡上人が乗泉寺に入られて以来の伝統で、徹底したお給仕と共に、その伸展を支えた鍵と言えます。私の学んだ昭和の終わりには信徒の範囲も広がり、一日二十軒はなかったですが、それでも月に何度か設定する助行日には五〜十軒の巡回は常で、ご信者もよくお助行されて、組内にお助行できない家はほぼありませんでした。その報告を含め、この「信心を育てるシステム」を徹底稼働した経験が、辛いご奉公も楽に勤められたと仰せです。

▼暑くてセイロに入ったような夏、またこの厳寒の北の地でのお助行は、私にとって決して苦にならぬ。有難いことで、修行させていただいたお陰です。札幌でのお助行は、一軒一軒、根気よく回りました。まずコンコンと折伏してお初水をあげること、お給仕の仕方から教える……巡回のお助行はお看経の時間も短く、一軒でも多く廻ることを心掛けますが、訪問先では必ず一つは折伏し、ご信心を具体的に勧めます。初心の方の場合、御宝前のお給仕を一つずつ教えるのが基本です。相手によっては朝参詣や御講参詣を勧めたり、お教化や信行相續、御有志の仕方など、何か改良のヒントになることを教えます。ベテランの役中さんには当たり前なことでも、知らないこと、出来ていないことは意外と多くあるのです。

▼どの家もだいたい同じで、玄関に入るとすぐ御宝前が目にはいる。畳が敷いてない板の間です。ここで子供たちが相撲を取ったりして遊んでいる。お参りに行くと、角巻といって、三角の布を敷いてもらってお助行を始める。およそ北海道のご信者の生活はこんなもので、だいたい想像がつくでしょう。だから「お金がないからお参り出来ない」と言うが、絶対にお金を与えてはダメで、親からもらった二本の電車(足)がある。結構、歩きますよ。歩いて参詣します……畳も座布団もない、貧しい家が多かった戦時中の札幌のお宅では、ご信心を勧めても「お金がない」を理由に断られる。裕福な人でも「お金がない」と言われると言葉が継ぎにくいのに、実際に気の毒な様子を目にすれば、「仕方ない」と人情が働きます。しかし石岡上人は、そんな同情は無用と断言されます。実際にご利益を得て良くなる人は、遠方でも歩いてご参詣します。温情よりやる気にさせて、功德を積ませるのがご奉公です。

▼もう癖が付くと、電車賃もらわないと参らない。御会式も与えぬとお参りしない。そこで「朝参詣しなさい」と切り込むと、出来るようになる。朝参りが出来るご利益がいただけるようになる。そうなると、家でのお看経よりお寺のお看経のほうが楽で、よくあがるようになる。お寺であがらん人は家でもダメ。そんな人はお寺へ行きませんよ。「やめる」「やめる」が口癖のセリフで、どうにもなりません……「信者に育てる」と腹を括って勧めると、出来るようになるとも仰せです。筋の悪い人は「参らない」「唱えない」「すぐやめるとごねる」等と、どうせ困難で、お金をもらって「ご奉公してやる」癖をつければ逆効果です。

【御教歌】 捨おかばおのれそだちにわるうなる 弟子も植木もせはしだいなり



役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ (R1/E)

「負けん気と根気と慈悲」 ⑦五か年計画

石岡日養上人が昭和五十五年に名古屋建國寺の役中教養会でお話しされた「負けん気と根気と慈悲」と題した講話から、役中のご奉公のポイントを学ばせていただきます。

▼一軒残らず、根気よく折伏させてもらいました。それが今日の始まりの姿でした。それでも当初の昭和十八年は、八月から十一月の教化年度の締切までの四か月で、一人の信者が二十軒教化したので四十軒になったのです。そこで翌十九年度の計画を立て、教化五か年計画を作ったのですが、会議は一同熱心に討議して午前一時までかかったのを覚えています……東京と違ってやる気が低く、貧しいご信者ばかりでご苦労をされる中、それでも赴任した初年度は、終盤の四か月で二十戸のお教化をする人があって倍になるのですから、石岡上人の熱意が早くも伝わり始めた様子が分かります。熱意が人を動かすことを教えています。

▼お寺建立のため、十年計画の御有志の積立案も作りました。「年に百戸、五年で五百戸にしよう」「御有志も十万円を目標に」という具合に決定したのですが、無理を承知でかかったことが、なんと四十軒の信者で見事に成就したのです。祭りの夜店を出す人に、お初穂を取ってお上げさせますと、数千円儲かったと喜びます(略)今までの生活困難がウソのように楽になって、五か年計画が終わらぬうちに、とっくに十万円が達成しました……大きな夢を身近で現実的な目標に置き換えるには、中期の計画は有効です。目指す信徒軒数を五年で割り、その一年分を十二か月で割って当月の目標を意識したご奉公が出来る、夢は現実に近づきます。ただ、四十軒の信徒が毎月九戸ほどのお教化を積み重ねるのはハイレベルな挑戦です。それを可能にしたのが、基本のご奉公をきちんと努めた現証であると仰せです。

▼札幌の円山公園の隣に妙証教会がありました。この地は地主の仕事場で、私共が本山にご参詣して帰山すると、隣の地主の家が火事で焼けていました。この隣地は、実はお寺ですと前から欲しくて再三交渉していましたが、七十五万円でも売らぬと話し合いが付かなかった土地です。百八十坪で建物八十坪の大きな家でした。それが焼けたのです。公園のアカシアの木も焼けたのに、お寺はハメ板一枚焼けません……予定より早く十万円の御有志が達成できて、石岡上人は十二〜三名のご信者と本山に御礼の参詣に行かれます。帰ってくる、早速に現証が頭れます。隣地の地主宅が火災になったのに、お寺は不思議と類焼を免れたのです。この火事を出した地主の家の土地は、隣地ですので以前より入手しようと何度も交渉しながら、まったく相手にされずにいました。それが、ご奉公の功德で動きます。

▼くつついている丸焼けになった隣家は、実は元ご信者でやめた人でした。佛立講の信心をしていると娘の貰い手がないと言って御本尊をお捲きしてしまったのです。ところが娘に縁談が来て、嫁入り荷物の布団から長持、タンスなど山のように積んであったのが火事で丸焼けという始末。私は本山から帰って早速挨拶に行きました。その家は札幌でも指折りの金持で、鉄の土蔵だけ残っていました。その主人が「お講師さん、この焼けた土地を買ってくれ」と言います。私が「三十万円ですか」と切り出すと「三十五万円で買ってくれ」とくる。「一存で決められんから、役中さんに相談する」と返事して帰り、幹部さん一同に諮って「買うべし」と決定したのです……火災の現証で、地主さんは御宝前に護られるか否かの違いを肌で感じ、御罰のあらたかさを知ったのでしょう。結局、相場の半分でお寺に譲るのです。ご弘通が伸びればお寺が栄え、街も栄えると教えられた石岡上人のご奉公の第一歩です。

「御教歌」 信ずれば実に御利益有難や まことに妙なみのりなりけり

役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ (R1/6)

「負けん気と根気と慈悲」 ⑧健全な財政に

石岡日養上人が昭和五十五年に名古屋建國寺の役中教養会でお話しされた「負けん気と根気と慈悲」と題した講話から、役中のご奉公のポイントを学ばせていただきます。

▼当時、お寺は電話まで借りもの。貧乏にやすりをかけるとはこのことで、すべてが借りものです。年中赤字で、御会式があるとお互いに二千元、三千元と強制的に人の懐を当て込むといった有様でしたから、隣地を買収するのは大変だったのですが、焼けたとはいえ相場の半分で買い取ることができたのです。そのようなお寺の財政状態でしたから、健全財政でこれからやろうと打ちだしました……財政はお寺を護持し、活発な弘通活動を展開する土台です。故に将来的に境内地を拡充したり、建物の補修をするなどの大きな支出があっても、そのとき慌てないよう計画的に備えるのも、ご弘通に集中する環境には不可欠です。しかし、現実にはお寺の財政に無関心なご信者は多く、結果、その場しのぎにもなりがちです。お金がない中での隣地の買収を、そんな財務意識を健全化するきっかけにされたのです。

▼地方へ代表参詣する幹部さんに交通費を出す、まず「これをやめよう」と申したので。私は「最高幹部が、お祖師さまからお金をもらわないとご奉公ができないなんて、こんなべラボウな話があるか」と言いました……財務改革のポイントは、「お寺の浄財はお祖師さまのお金。個人のために使っては申し訳ない」という浄財意識の教育です。税金も会費も、最終的に自分のために使いますが、お寺のお金はそれらと性格が違います。功德を積もうとお祖師さまに差し出す志が浄財ですから、それを平気で自分のために使えば功德行が成り立ちません。もちろん、お祖師さまの浄財は事務局が預かり、ご奉公に使わせていただくのですが、そこに浄財意識が働けば支出は改善されます。これを幹部から始めるのです。

▼「やめてください」と言つと、「お講師さん、あなたへも汽車賃くれてやる」と言つと。「お祖師さまの懐からお金をもらつて、乗泉寺のお祖師さまにお参りしても、ご利益はいただけるものじゃない。ちゃんとご奉公させてもらえば、電車賃などは相手さまからくださるからご心配なく。私もこんな習慣やめるから、あなた方もやめなさい」と言い渡すと、それが「この寺の家風に合わない」と言つたのです。「終戦になったから、お前さんはたった今、東京へ帰れ」と言つ……改革を進めると何事も逆風が吹きます。お金に関われば猶更です。悪い体質に浸ると、改善の必要性が見えないものですが、弘通が伸びないならば思い切って何かを変える勇気が大事です。札幌信廣寺は、ここから日本一の浄財奉納のお寺になりました。

▼朝、お看経が終わると御乗台の後ろから衣を引っ張る人がいます。「なんですか」と問うと、「昨夜、信者大会を開いた結果、お前さんはこの家風(寺風)に合わんから、たった今、出ていってくれ」と言つたのです。お講師さんと呼ばず「あんた」ですよ。お前さん呼びはりますよ。皆さんでしたら、こんな場合どうしますか。へーへーで尻に帆を上げて逃げ去りますか。「私はお師匠さんのご命令で札幌妙証教会のご奉公に上がったんです。お師匠さんの命令でしたらたった今、帰ります。あなた方ご信者の指図は受けません。ああ、そうですか。かまわん。一人でやります」と。その上、おまけを付けて申し渡しました。「それが不服ならやめなさい」と……逆風に耐える鍵は責任感や使命感と仰せです。頼まれ仕事と思うので、気に要らないと腹を立て、投げ出します。しかしご奉公は本来、御法さまから授かってお勤めします。逆風でご信心の筋を通せるのも、「させていたたく」という真摯な意識です。

【御教歌】 願くはつかひ給はれ奉公を するなんどいふ身分ではなし



役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ (R1/7)

「負けん気と根気と慈悲」 ⑨お寺参詣で功德を積ませる

石岡日養上人が昭和五十五年に名古屋建國寺の役中教養会でお話しされた「負けん気と根気と慈悲」と題した講話から、役中のご奉公のポイントを学ばせていただきます。

▼このように、当初は二十五戸から発足したご弘通も倍の五十戸に、次の年にも百何十戸、そして教化五か年計画が達成して五百戸になったのです。しかし、全部が育つというわけにはいかなかったのは、戦争でご信者が各地に分散・移動し、ようやく昭和二十二年に安定した五百戸が出来たのでした……小さな道場が宗門トップクラスの大寺院へと大躍進をする、第一歩となる大事な話をされています。まずは五百軒の信徒を擁する寺院にしようとして夢を描き、「五年間、毎年百戸のお教化を積み重ねるぞ」とご信者が意識を共有して、異体同心で進めたご弘通です。一人ひとりが妥協しない、強い勢いを感じます。教化子はすべてが育ちませんので、とにかく下種先を求め、お教化を積み上げていくことが大事なのです。

▼皆が改良し、皆が互いにお助行に回るようになって発展していきました。振り返ると、私がひざ詰めで折伏したり、有難くないと言っご信者をどう折伏すればよいかなど、ずいぶん苦労も多かった時代を過ごしてきたのです。こっちが御利益を与える訳にはいかないのです。祈禱師ではないのですから。各自がまず、お寺にお参りいただく。最初は「お寺の土を踏みなさい」と教え、日参が出来ると「千日参りをしなさい」と言う。大尊師の御指南に、千日参りして御利益をいただいたという例が示される通りです……皆のやる気を引き出したのは、石岡上人のご指導です。当初はひざ詰めでコンコンと折伏するなど、ご苦労も多かったと仰せですが、やがて皆が改良し、お助行に回るようになって、流れが変わるのです。折伏のポイントはお寺参詣。自身が功德を積めば、御法の有難さが感得できます。

▼お寺にお参りして罪障を起こすのは、下の下なんです。喜んで「どうか御利益をください」とお願いするんです。よくご奉公するようになると身体も丈夫になるし、いろいろなお計らいがいただける。子供が朝参りして親が出来ぬということがあるか。若い人から盛り上げていけば、お寺は盛り上がります。これらはご参考までで、決してこの通りなさいと申しているのではございません。各々の事情も違いますからね。でも基本は同じです……お寺に参ると、それが功德になるよう参り方の心得を指導する。時間をかけて参った功德も、愚痴や慢心で積んだ罪障が差引きしては困ります。そのためには「やらされてる」ではなく、御利益をいただく意識を持たすこと。そして、子どものご信心を育てよと教えておられます。

▼門が開かない前から立って唱題して待つ、これこそ大尊師時代の「ご信者の姿だったのです。これを私は、乗泉寺に入って習いました。札幌に参ってから、開門参詣をまず皆さんに教えました。当初は朝参りに誰も来なかった。私一人、二時間お看経をさせていたでいていました。独りのお看経は大変ですね。やはり大勢でおあげさせていただく方が上げやすいです。一人だと、どうしても居眠りをしたりしていきません。お互いに拍子木を高くするとか、つつかれると目が開きますから、目を開けてお看経すると御利益をいただきますね。居眠ってお看経して、御利益をいただくという御教歌はありません。これが佛立宗の教えです……朝参詣が如何に大事かを仰せです。開導聖人のご時代も、東京乗泉寺の躍進も、そして札幌のご弘通も、共通するのは朝参詣の活気とのご指摘は大事な心得です。少ない参詣ではお看経に力が出ません。大勢が参り、互いに刺激しあって口唱に励めば、必ず変わるのです。

「御教歌」かどの外に御法の声のきこゆなり 朝まいりぞや早くあけなん

役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ (R1/8)

「負けん気と根気と慈悲」 ⑩お初穂をお供えしよう

石岡日養上人が昭和五十五年に名古屋建國寺の役中教養会でお話しされた「負けん気と根気と慈悲」と題した講話から、役中のご奉公のポイントを学ばせていただきます。

▼よそがどんなに不景気でも、うちはお陰をいただく。おまけが付くのはお初穂を供えるからです。お金が入ったら必ずお初穂を取って供えるんですよ。御宝前のためのお金ですから、他に絶対、使ったらダメです。私は今も小僧ですが、得度して間もない頃、これを佛立第八世日叡上人から教えていただき、「ああ、そういうもんかなあ」と真似させていただいて今日があるのです……現代社会では、経済活動は大事な生活の基盤で、これが安定しているか否かは日々の生活や人生を大きく左右します。そこで財の果報を磨くため、財の功德の積み方を学ぶのですが、その柱となるのが「まず御法さまに」と供えるお初穂です。お金は我が物で、余ればご信心に回すとした凡夫根性を改めさせれば、靦面に果報が変わります。

▼体験を少し述べます。まだ学校へ行っていた頃ですから、余分のお金なんかありません。私の弟も東京の学校に行っていたから、時々私のところにお金をねだりに来るんです。「兄さん、ゼンコくれ」と。私の持っている二円を与えてしまったら、どうなるかと考える。私はお寺に居させてもらっているからお金は要らない。しかし、ご奉公用のタオルは、どうしても自分が買わねばならない。タオルは板の間や廊下を拭くのに入用なのです。「自分のご奉公の場を使うものは、自分が買ってご奉公すると御利益がいただける」と日叡上人から教えられました。そういうものかなと思つて、自分のお金でタオルを買って掃除する。そのために、白いタオルのお金は取っておく。ちなみに当時、タオルが七十銭で二本買えました。今の渋谷の東横デパートがあるところに公設市場があつて、よく学校の帰りに求めに行ったものです。弟に持って行かれたら、このタオルが買えなくなる。ずいぶん悩みました……「御法のために使うのを優先する」「まずご奉公の分を取る」といったお初穂の精神の大事さを、理屈ではなく体験で学んだと仰せです。体験できたのは、お師匠に教わった通りに「そういうものかなあ」と素直に実践したためです。実生活には必要なもの、欲しいものが溢れていますが、理屈を付けければそつちを優先し、お初穂で果報を増す体験ができないのです。

▼また、その頃市電(都電)の学生定期が二円でした(昭和六年頃)。これも弟にやっつてしまつて買えなくなる。学校まで歩くと二時間ばかりかかる。御供水の瓶四つを毎朝洗つて、御供水を取り替えるのが大変で、足袋を履くと濡れるから素足でやる。寒中の冷たいところを裸足でご奉公。それが済まぬと学校に行けない。定期券がないと試験を受けにも行けない。歩こうとすると、御宝前のご奉公が出来ない。進退窮まったのです。それでもお初穂には絶対手が付けられないと思ひ、悩みました。私は電車賃にも困るという、罪障が深かったのです。よう。「南無妙法蓮華經の稽古をやめる。信心するなら学費は送らん」と郷里の父親に言われていた当時、それを押し切つてお寺には行って私でした。それでもお初穂を取ることは、バカの一つ覚えで守り通して五十七年。今からでも遅くはありません。私のように電車賃にも困ると言うことは、減多にないでしょうから。ですから札幌に参りましても、お初穂の大事なことをごまます痛感させられるのでした……大事な弟の面倒も見たいが、ご奉公しながら学校に行くためには定期代も必要……と進退窮まつて、お金でその場の解決をするよりも、財の果報を磨くことが先決と確信されます。お金に困る人ほど、お初穂が大事です。

「御教歌」 うそでない法華の御文まこと也 福をとる手は欲をはなせよ



役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ (R1/9)

「負けん気と根気と慈悲」 ⑩お賽銭の功德

石岡日養上人が昭和五十五年に名古屋建國寺の役中教養会でお話しされた「負けん気と根気と慈悲」と題した講話から、役中のご奉公のポイントを学ばせていただきます。

▼お賽銭は朝参りしたら必ずおあげするように。お賽銭は御宝前に「ご供養申し上げるんですから、御有志なさい。お花とかお口ウソクとかおあげしますが、同じおあげするならお賽銭ですね。賽の河原でも通れると昔から言います。通れんところを通るのがお賽銭です。食うに食われんところを、食えるようになります。これについて、こんな例があります……一般に「お賽銭」は、神仏への御札に捧げるお金と理解されますが、本門佛立宗では御宝前のお陰に感謝して、「功德を積もう」と奉納しますので、賽銭箱と言わずに功德箱と呼ぶ寺院が多いようです。賽の河原との関係は不明ですが、ご参詣ごとの感謝の奉納は功德甚大です。

▼(貧しい土門モモヨさんにお賽銭を勧める)この人は、言う通りに実行しました。ある朝のこと、勤行を終えると私を訪ねてきて「お講師」ときた。「何ですか」と言うと「実は主人が昨日一日商売に出て、ゼンコ何も持って帰らなかった。どうしてくれるんだ」と。北海道の人はそういう言い方で単刀直入に言ってくる。そこで私は「謗法はありますか」と聞いた。「ない」と言う。「朝参りしてますか」と言うと「しています」と答える。朝参りして謗法がなくで、これはおかしい。「じゃあ、お賽銭あげましたか」と言うと「昨日は忘れた」と言う。「なぜ忘れたのか」と聞くと「財布を開いたら御供養券がなかった」。そして「十円玉が二つありました」と言う。この人は、普段は一円玉もない人ですよ。それが一日生活して十円玉が残った。つまりゆとりが出来たわけですね。それをおあげすればよかったのに、そこに気付かない。言われた通り守るのも信心だけれども、大人が子供の真似をして御利益いただけるか。須達長者が童子の真似をして、砂の餅をあげて御利益がいただけるか、ということですよ……極貧で五人の子供を育てる婦人にご利益をいただくかそうと朝参詣を勧め、その際にお賽銭をあげよと教えますが、わずかなお金もないので御講参詣を勧め、御講でいただく御供養券をお賽銭の代わりに奉納させます。それを素直に実行するうちに、気付くと毎日お金が残るように果報が変わった事例です。ただ、本人は御利益に気付かない。そこにメスが入ります。

▼長者は長者、分相応に志を起すべきです。御本尊は口を利かれないけれど、分るように教えてくださる。解釈してあげる人がウツカリしていると、見過ごしてしまいますね。御有志することは、絶対にお寺のためでもなければ幹部さんの顔を立てることもありませんよ。我が身のためなんです。これはお師匠さんから教えられて、五十何年守り通してきました。家内をもらえば家内に教え、守らせなければなりません。皆のお寺だ。皆御利益をいただくんだ。お金のある人だけ、金満家だけがご利益をいただくお寺ではないんだと、分かるように教えたのがこの御利益談ですから、お金のある人だけすればよいというのは大きな見違い。情けは人のためならずと申しますが、御法さまのためあげさせてもらうのは我が身のため、子孫のためだということ、この一枚の御供養券は教えてくださった。お祖師さまは口はおききにならないけど、骨身にこたえるようにお教えくださる。我々にも教えてくださる。これが本門佛立宗、本山宥清寺のお祖師さままで「ございます……豊かな人は相応に、貧しい人もそれなり、皆が功德を積んで果報を磨くのがご信心です。言われたことしかしない人、人任せの人に、自身が積む功德の大事を教えましょう。参詣時の賽銭奉納は、その第一歩です。

「御教歌」 死ぬ程の貧乏はなし金よりも 功德をためることぞ第一



役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ (R1/10)

「負けん氣と根氣と慈悲」 ⑫お初灯明料の功德

石岡日養上人が昭和五十五年に名古屋建國寺の役中教養会でお話しされた「負けん氣と根氣と慈悲」と題した講話から、役中のご奉公のポイントを学ばせていただきます。

▼本山初灯明料を気張らせてもらうようになって早や三十年余りで、北海道第八弘通区に、本山のお祖師さまからいただける交付金が六千万円も積まりました。初めは年二万円からですから、塵も積もれば山となるもので、北海道全体のご弘通のためになっています。どうかご信者の皆さんは、自分のお寺だけ考えたらダメですよ。全体のことを考えて皆が切り替えていけば。クルッと変わると思います。「本山へ、乗泉寺へと御有志を持ちだそうとして、この寺をどうしてくれるんだ」と言われましたが、このように切り替えたから現在の豊かさがいただけたと言えます……。「本山初灯明料」は、一年の最初に使うお金を、元の御宝前である本山のお祖師さまにお灯明料として奉納するご奉公ですが、そのために全国の佛立信者は一年をかけ、日々の生活で「お初穂」を取って準備します。つまり、日々の「まず御法さまに」という大勢の清らかな思いと、それを「一年の最初に本山のお祖師さまに」という浄志が集約されたご奉公ですので、大きな功德を生むのです。目先の損得を考えると「よそに出すのは損だ」と思うのが凡夫かも知れませんが、長い時間で見ると功德は一目瞭然と仰せです。

▼信廣寺のあの本堂を建立したとき、予算の五千万円は当時としては天文学的数字でした。(略)今は土地も二千坪、向かい側を合わせて三千六百坪と拡がっていましたが、元々百二十坪とご供養券一枚からの出発ですから感無量です。一円を粗末にしたらダメです。一円が財の基本をなしている。これが各家庭の基ですから、「粗末にしないようお初を取って、儉約できるだけやってご覧なさい」「月に三十一円、年に三百六十五円、それを本山初灯明料に一人ひとりが上げてご覧なさい」。私は声を枯らして、本山初灯明料のお供えを教えました

……宗門でもトップクラスの大躍進を遂げた信廣寺ですが、これが実現した一番の原因は、わずか一円にでも気持ちを込めて、お初穂として御宝前にお供えする信心を、一人ひとりのご信者に丁寧に教えていかれたことにあると仰せです。「できない」と言わせてしななければ、いつまでもご信心は育ちません。出来るところから実際に功德を積みめば、相応に現証を得て、気持ちの上でも実際面でも、財の功德が更に積めるようになります。天文学的な数字を現実のものとしたのは、財の基本となる一円のお金にも真心を込める、日々のお初穂の力です。

▼また、「年末は御礼だよ」「元旦は年の初めのお願いだよ」と一年中のご祈願を細かく教え変えただけで、たとえ十円のお金でも「暮に五円、正月に五円」と言うと感じ方が違います。大樂にお供えできるように勧めるのです。これを覚えたら「だんだんに増やしてご覧」。同じようにいつまでも一円でなくても、十円残金があるなら「十倍しなさい」ということなんです。そこに気が付かないようでは須達長者にはなれません。ない中から功德を積ませてもらおう。そのお陰で、このようなインド第一の長者ができる。功德を積むことは、お釈迦さま時代もお祖師さまの時代も、ちっとも変わっていません……経済的な果報や環境は人それぞれですから、皆が同じように浄財奉納できません。大事なのは分相応に、功德を積む工夫をすることです。余裕があるのに「人並みに納めている」と金額面で並んで安心すると、財の功德は積み損ねます。すべてを施して大富豪となった須達長者に学ぶのは、精一杯の功德行なのです。

【御教歌】 みほとけに供へし徳は身につきて 生々世々にはなれぬときぐ

役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ (RI/11)

「負けん氣と根氣と慈悲」 ⑬御供水は生命の綱

石岡日養上人が昭和五十五年に名古屋建國寺の役中教養会でお話しされた「負けん氣と根氣と慈悲」と題した講話から、役中のご奉公のポイントを学ばせていただきます。

▼戦後の北海道へは、樺太(現サハリン)から引揚者が帰ってくる。東京からは焼き出されて来る。戦後は、食料も私共は、一日に小さなジャガイモ三つでした。冷害の年には、そんな食糧が皆が我慢していました。私も、ご信者さんたちも同じです。雑草を刈って食べたという話もある中で、私共は結構な方だと言われていたその頃、毎日お助行して立ち上がり方を教えて歩きました。「ああやりなさい」「こうやりなさい」、そして「御題目をお唱えしなさい」、「どこに行くにも御本尊を背負って歩きなさい」と教えていたのです……終戦後の混乱期を、

ご信心を支えに乗り越えた先輩教講のご奉公で、今日の宗門の土台は出来ました。改めて当時の体験に接すると、何も無い中で御法のご守護だけを信じ、日々の信行に努め、苦惱する人たちに口唱を勧める菩薩行に努めればこそ、妙法の絶大な功力の真髓を皆が掴まれたことが分かります。諸先輩のご弘通と現在の違いは、そんな叩き上げの信のレベルの違いです。今の豊かな日本を、戦後の状態に戻すのは非現実的ですが、せめて先輩方のご奉公をお伝えし、何も無い中でも最も頼りになるのが妙法であることや、ギリギリの状態でも信じ切る必死の信心に現証が顕れ、不動の信に至ること等を学んで、次世代に継承せねばなりません。

▼御供水だけは井戸で汲む。これが唯一の、その頃の命の綱で、ご信者宅を回ってお看経が済むといただく。そして一軒一軒回るのでしたが、ジャガイモのほかはまったくの御供水だけで、一日中、十キロを歩いて回る。御供水は是好良薬どころか、生命の綱になるようなご利益がいただける。食料にもなる。栄養剤にもなる。大きなご利益がいただける大切なものと、私は肌で感じています……御供水の有難さや、それがただの水とは違うことを、私たちは御指南で学びます。ただ、開導聖人は、それを本当に分かるのは、実際に有難く頂戴した信者に限ると仰せです。体調や時間に不都合が出来れば、すぐにご奉公が出来ない口実にしがちなお互いですが、「腹が減ってはいくさが出来ぬ」などと万全を期さずとも、御供水だけあれば大丈夫と実体験から仰せです。御供水にこもる妙法の命が、菩薩の命を繋ぐのです。

▼皆さん、嫌がっていたただかぬ人、ありますか？ 御供水さんだけは好きになって欲しいものだと、私の体験からも、そう叫びたいのです。と、申しますのは、今から十五年前、私はガンに罹りました。胃と肺のガン、喉頭ガンにもなり、声が全然出なくなりました。今は声が出るようになりましたが、マイクのお世話にならんと皆さん方に届かない。昔は大きな声がよく出たので、マイクなどなかった時代でしたが、結構、隅々まで届くようでした。それが、こんなになっちゃった。喉へガンが移ってね。ところが、これもご利益です。ガンは治療の方法も薬もない。第一は精神力、第二に体力、第三に薬だと、ガンの博士が教えてくれました。ガンでもお願いして、御供水をいただいて治ってしまう。有難いことです……石岡上人がガンを克服されたのは、有名な話です。今から半世紀以上も前のことです。ガン治療もずいぶん違ったことでしょう。何より「ガン」という言葉の重さが雲泥です。絶命の死病として、宣告されたかも知れませんが、しかし、それでも「御供水があれば大丈夫」と固く信じ、有難く頂戴する中で、見事に現証を得られます。下地にあるのは、戦後の物のない中で、肌で感じた「御供水の確かさ」です。現証の体験は、いざと言うときの力です。

「御教歌」のんで見て御利益を得てなる程と、そこで薬の第一をしる



役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ (R1/12)

「負けん気と根気と慈悲」 ⑭御供水の有難さ

石岡日養上人が昭和五十五年に名古屋建國寺の役中教養会でお話しされた「負けん気と根気と慈悲」と題した講話から、役中のご奉公のポイントを学ばせていただきます。

▼大正十二年、関東大震災に遭いました。宮城(皇居)前をちよど学校から歩いて帰る途中でしたが、道路がお豆腐が揺れるようになるんですから凄いものです。丸ビルの外壁がガラガラと崩れ、建築中のビルも倒壊して、傍にいた人々が即死するのを目撃しました(略)静まってから、芝の岡田さんというご信者宅まで参りますと、家人は青くなって家に入らない。

私が入ろうとすると「石岡さん、危ないから入ってはダメ」と言う。私は無理に入って、拍子木を叩いて大きな声でお看経をしました。すると家人もすっかり落ち着いてね、恐ろしくなくなりました。慌てるからいけない。ある命も取られる。ちゃんとお助行して下宿先に帰りました……御供水の妙不可思議を感得した原体験として、まだ在家の学生時代、大正十二年の関東大震災の話を紹介されます。相模湾に発生したマグニチュード七・九の大地震は、十メートルを超える津波や二メートル近い地殻変動が記録されていますから、揺れも大きく、倒壊家屋も多数ありました。余震の続く中、そんな家屋に入るのは自殺行為です。しかし、被災した近所のご信者宅を訪ねてまずお看経をされたのは、さすがは石岡上人のご信心です。

▼断水すると言うのでバケツと一升瓶に水を採った。もう少し、と採っていると水が出なくなってしまうのですが、断水の一步手前で飲料水に恵まれ、不思議なことがあるものだと思います。御供水の功德と思いました。それがあったので、ご飯にも飲み水にも困りませんでした。下宿先だった戸田一家四人と教化子が三人、私ともで八人でしたが、前の道路が広くて安全な場所だったので、幕を張って懐中御本尊をお祀りしてお看経です。落ち着きますね。だからグラグラ揺れたら御題目を唱えるのです。自分一人でなく、皆に唱えさせるのです。これで慌てて怪我をすることなく落ち着きます……断水と聞いて、まず御供水用の水を確保しようと思われたのも、常に御宝前第一の石岡上人ならではです。お陰で断水の一步手前で、不思議と生活用水も確保できたと仰せです。きつと、水が手に入らなかった家は多かったのでしょうか。お陰を感謝してお看経。不安を感じればお看経。街が様変わりした大震災は、人々を無気力に陥れたでしょうが、それもご信心で乗り越えられるのだとお教えです。

▼九時頃になると火の粉が飛んできました。そこで一同は、ゆっくり芝の山内に逃げ込みました。今の赤十字病院のある所、その石垣へ三世帯分の荷物を積んで、ゴザを被せて巻いておいた。そして御供水を撒いて、いよいよ危ないというので御本尊さまと逃げた。翌朝四時頃、火が消えたのでそこまで帰ると、他の荷物は皆焼けていたのに、御供水をかけてゴザ包みにした私共三世帯の荷物だけ火が点いておらず、焼けてなかった。御供水の撒いてあるところは違いますが、どんな災難に遭っても、根気よくお看経してご奉公させてもらうとちやんとお計らいがいただけるものです……この大震災は十万人を超える死者・行方不明者を出しますが、その多くは地震後の火災による焼死でした。ちよど日本海を北上中の台風の影響で関東平野には強風が吹き、木造家屋が密集する東京は火の海になるのです。多くの人が熱さを逃れるために川に飛び込んで果てます。地震発生の日の晩には東京の気温は四十六度を記録し、五日間の体感余震は九百余回。そんな阿鼻叫喚の地獄絵図のような中の避難でしたので、日頃のお看経の大切さ、御供水の有難さが際立って分かることを仰せなのです。

「御教歌」 火盜病不慮の諸難をまぬがれて 如説信行弘通成就



役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ (R2/1)

「負けん氣と根氣と慈悲」 ⑮種まきの大事

石岡日養上人が昭和五十五年に名古屋建國寺の役中教養会でお話しされた「負けん氣と根氣と慈悲」と題した講話から、役中のご奉公のポイントを学ばせていただきます。

▼お計らいはどこにあるか分らないから、常日頃「ご信心を」やらしてもらい、やった者が最後の勝利だと言えます。今、皆さんが一番困るのが石油ショックで、倒産して夜逃げする人も世間にはあるでしょう。そういう場合、どうするか。私どもの場合、まず朝参詣したら商売繁盛。会社は安泰で潰れません。次に教化をなさい。折伏させていただく人の名前を名簿にして、御宝前で名指しでお願いすると教化が出来る。教化のための朝参りだから御利益がある。死ぬ人が治る。倒産する人が助かる。「倒産しませんように」ではなく、「教化出来ますように」とお願い言上するのですよ。間違わぬよう。これですね……大正十二年の関東大震災での御利益を話され、いつ起きるか分からない不慮の災難でもお守りいただくには、日頃の信行、つまり種まきが大事と仰せです。この種まきの柱が朝参詣とお教化、つまり朝一番からご弘通の思いをしっかりと持って日々のご奉公に臨む生活にあることは、教えの筋の上からも、石岡上人の実体験の上からも、揺るがない鉄則です。もちろんこれは、今より交通の便の悪い北海道の話ですから、実践には堅い決意が要ります。故に現証もあります。

▼商売には駆引きが必要でも、「ご信心に」ごまかしは効きません。言い訳は通らんといいこと。私は融通が利かんと言われますが、「ご信心だけは融通を利かせたら結果は無慈悲になりますね。私にも負担になります。我が身に被さってくるから、元の病氣が現れるかも知れません。ですから、口が腐っても無慈悲になることは言わない。恐ろしいですから。命のあらん限りは「本山のお祖師さま、どうぞこの身体を自由にお使いください」とお願いしているんですから、私の身体であって私の身体でないんです。だから大事にしているのです……「例年並みに出来た」「他の組と同じ成果」等と計算しながら余力を残す駆引きは、御利益の種まきになります。果報に応じ、精一杯の志しで努力してこそ罪障が滅し、御法のご守護も得られます。ゆえに時に厳しく映つても、全力で功德が積めるよう背を押すのが折伏です。ただ、皆がよく心得て、喜んで努力はしませんから、辛がって挑戦する姿に温情をかけ、また良く言われたい保身で筋を曲げる人がいます。これは相手の功德行を妨げ、自身も罪障を積む無慈悲な行爲です。因果の道理を守って筋を通すには、御法に捧げた身と自覚せよと仰せです。

▼青年会も薫化会も、お寺のお金を使ってやることはまかりならん。めいめい、これをやりたいと思つたら、お互いの小遣いを節約し、出し合ってやって欲しいと、いつも私は教える。青年会が出すパンフレットや雑誌も、お金を出し合って作る。そして買ってもらう。お祖師さまのお金をタダで貰い使うのはもつてのほか。お祖師さまに差し上げるんであり、タダで貰うのはけしからん。種を蒔いて実がなるんで、この道理が分らんとダメですね。酷い人だなと思うかも知れませんが、私はこの信条で三十何年も続いて今日もやっています。青少年時代の若い人たちをこのように指導したら、どんな苦勞にも耐えられる信心体質が出来る。ここが大事で、ここに信心相続の価値があり、法灯相続の真の意味もあるのです……温情は特に若い人たちに注がれやすく、肩代わりして正しい種まきを教えないと、それが信行相続の失敗の因となります。「お参りさせて気の毒だ」「お金を使わせて可哀そう」ではなく、自信を持って功德の積み方を教え、御利益の種まきをさせるのが育成のツボと押さえるのです。

【御教歌】 ほねおしみすこい事してむくはぬと 思ふは因果しらぬものなり

役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ (R2/2)

「負けん氣と根氣と慈悲」 ⑯お初灯明料の意義

石岡日養上人が昭和五十五年に名古屋建國寺の役中教養会でお話しされた「負けん氣と根氣と慈悲」と題した講話から、役中のご奉公のポイントを学ばせていただきます。

▼お初灯明料の意義を糺し、信廣寺では先に述べた心構えで、年々倍増で本山御宝前に差し上げてまいりました結果、乗泉寺では第一位というお寺にさせていただきました。全国でも抜群の功德と言われるまでになったのです……今や宗門を代表する大寺院となり、境内地や寺観はもちろん、お教化や本山奉納金、寒修行のご奉公振りなど、すべて全国トップのご奉公を展開する信廣寺。その因は、本山初灯明料の意義を守り、倍増に努めたことと仰せです。

▼「元を良くしたら枝は繁る。花に肥やしを与えても実は成らぬ。根元が大切だ」。今日の姿を見ていると、何でもかんでも人に抱っこ、おんぶしてもらわねば何も出来ないといった風習ですが、これは間違っている。お寺からお金を出してもらわんと、ご奉公しないという根性はけしからん。叩き直すのに苦労が要るが、やらねば教えが曲がってしまう。七百回御遠諱に向かって、そのつもりで皆が気張れば。きつとお祖師さまに悦んでいただけるような御遠諱が奉修させていただけるものと信じるのです……基本は自分のことより「御法のため」

「本山のため」「宗門のため」と功德行の土台を大事にすることで、それが根元が肥えれば枝葉も伸びるのと同様に、全国の寺院や個々のご信者が栄える基本です。ところが今は「してもらおうこと」に馴れ、宗門が段取りしないとご奉公が出来ない風潮と折伏され、苦労しても叩き直せと呼びかけられます。いつの時代も「安きに流れる」凡夫の、大事な誠めです。

▼振り返りますと、信廣寺の昭和十八年頃は電話一本もないお寺で、赤いお天目もない。座布団もない。ないないづくめみんな借りものばかりで、木琴、撞木まで借り集めてご巡教を願ったものでした。済むとお返しする。鍋、釜まで新調できずに借りていたので、想像もしていただけないくらい貧乏寺でしたが、お祖師さまのために入用とあってお借りし続けていました……言うまでもなく信廣寺は、最初から大寺院ではありません。元々財力があつて御有志が出来たのではなく、何もない貧しいお寺でした。と言うことは、正しく因を踏めば、信廣寺に皆なれると仰せです。あの頃の信廣寺よりひどい寺院はないのですから。

▼戦後、ぼつぼつ物資が回るようになると、よそのお寺はそれらを購入しはじめましたが、札幌はジツと我慢して、当座はずっと借り物で過ごしました。ご巡教があつて、ご供養を差し上げるのに、御導師はじめ代表幹部さんたちは一同が一間に集まって、仕出し屋からの粗末なものを召し上がっていた。これが当時の精一杯のご供養で、ご奉公者はおにぎり一個が当たるか当たらんかで頑張った。そういうやり方で切り抜けてきたのです……では「どうすれば貧しくてもよそに勝る奉納が出来るか」というと、本山の御宝前にお供えするため「節約する」「辛抱する」に尽きます。石岡上人は、ご巡教のご供養さえも本山初灯明料のために質素にし、その中で精一杯の志しを込めてご供養することを教えられました。そんな思いがご信者の隅々にまで浸透し、本山への奉納が増え、お寺が功德を得て栄えたのです。

▼共々が修行ですから、これが正に末法の修行とあって、今日もその根本精神は変えないでいます。出家も修行ですから、共に苦勞する悦びの心を持つことが大事で、「大切なこと」と思つて続けています……お陰で今は昔と違い、堂々たる運営がなされる信廣寺ですが、自分のことは始末して本山の御宝前を大事にする精神は、修行として押さえるべきと仰せです。

「御教歌」 死ぬ程の貧乏はなし金よりも 功德をためることぞ第一



役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ (R2/3)

「負けん気と根気と慈悲」 ⑰佐渡のお祖師さまを忘れるな

石岡日養上人が昭和五十五年に名古屋建國寺の役中教養会でお話しされた「負けん気と根気と慈悲」と題した講話から、役中のご奉公のポイントを学ばせていただきます。

▼古いご信者さんの中では「切り替え」は中々たいへんなこと。相当思い切った膝詰めの折伏をしないと切り替えられない。その慈悲の折伏を誰がやるか。猫の鈴とネズミの話のように、体を張ってやる人がいなければ、いつまでも改良への切り替えのチャンスが与えられない。面倒だと思ったら出来ません……長い間やってきて、身に馴染んだご奉公の仕方は、私たちにとって楽なやり方の場合が多いですから、修正は困難です。御指南の筋や良い事例を示しても簡単には理解されず、無理に踏み込むと「では止めます」と逆ギレされることもありますから、根負けをすることもあります。若手や新しい役中よりもベテランほどこの傾向は強く、難しいケースも多いのですが、石岡上人が成功したのはそこで屈せず、しつこいぐらいにコンコンと、それこそ膝詰めで折伏をしたからだと仰せです。以下は実践例でしょう。

▼お祖師さまも龍口のご法難、佐渡では雪の団子で飢えをしのがれたというのですから、衣食住を封じられたと同じ。それでもお祖師さまは泣き言一つ申されなかつた。「こんなはずではなかつた」と言われましたか。むしろ「これほどの喜びはない」と申されたと承っています。札幌での御講席は御供水一本。家に帰ればジャガイモの茹でたのばかりいただいていた頃のことを忘れないで欲しい。御供水で頑張ったあの頃、それでも栄養失調にもならなかつたのだから……ある程度、条件が整わないと動けない、そんな人が増えています。「迎えないと参れない」「食事を出さねばご奉公出来ない」……と。本来、何もなくてもご奉公は出来ますし、その気があれば功德は積めますが、苦勞しない環境を整えてもらう癖がつくと、すぐ「○○で出来ない」となる。そこに「祖師のご時代は」「戦時中は」と持ち出しても、今の豊かな時代に馴れた人には通じません。しかし、それをも膝詰めで改良させるのです。

▼近頃は全般が贅沢になった。札幌の寒供養にはおかず(副食)を持ち込ませない。ご飯の茶飯ぐらいは出すが、おかずは付けない。そうすると漬物を持ち込んでくる。ニシン漬けなんかは北海道の名物で、美味しいですよ。それらを持ち込んでくる。「いかん」「ダメだ」と言って止める。寒参りの根本精神を忘れてしまつてはいけません。おかずがなければ雪は舐められん、食べられんどこに書いてあるか。仰つたか。佐渡を偲んでさせていただくご奉公ではないか。お寺のお祖師さまのご供養をいただくのに、その御前で「おかずがなければ食えん」とは何事ですか。とんでもないことだ、と私はきっぱり申しましたら応えたらしく、このおかず持ち込みはピツタリ止まりました……持ち込みの副食すら禁じるのは、今の時代では無理がありますし、相当に無茶な注文と感じます。それを納得させ、「お祖師さまのご苦勞を少しでも追体験して信心を鍛えねば」と思わせたのは、石岡上人の不屈の信念なのです。

▼いつの場合も「佐渡のお祖師さまを忘れるな」「御供水一杯で頑張り通したことを忘れるな」と、これを信廣寺では合言葉としています。「それじゃ俺もやつたろう」という道産子たちの意気を起こしてくれたのです。いつまでも、この意気で続けて欲しいものです……寒修行は皆と和氣藹々、美味しく食事をするのが目的ではありません。お茶菓子を目当てにお助行も筋違いです。それが、ともすると形式に流れ、体裁は立派でも本質のご信心が欠けるご奉公になりがちです。その改良に、猫に鈴を付ける勇氣を持つて臨むのがご弘通の鍵と仰せです。

「御教歌」 塩なめてくらした時を忘るるな 朝からさかなでめしをくふとも



役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ (R2/4)

「負けん氣と根氣と慈悲」 ⑩まず幹部・役中が旗振り役に

石岡日養上人が昭和五十五年に名古屋建國寺の役中教養会でお話しされた「負けん氣と根氣と慈悲」と題した講話から、役中のご奉公のポイントを学ばせていただきます。

▼ご弘通の祈願は、皆さんのお寺から各弘通区(支庁)へ、そして本山へ、宗門全体へと輪を広げて欲しい。各役中方にお願いしたいのは、「頭が回れば尾が回る」と言うのですから、まず幹部さんのご奉公から「改良」「切り替え」で頑張って、旗振りになって欲しい。氣合をかけて欲しい。そうなると、きっと教化は促進します。この点を見つめて、ご奉公して欲しいものと思います……ご弘通のご祈願は、宗門が方針を立てて各支庁に、布教区に、そして寺院にと割り当てるものではありません。個々のご信者の「今年はどうしても一個のお教化を成就しよう」「一人では自身がないので組で一個はできるような努力しよう」、あるいは「私は無理。誰かやってくれるかな」等々の様々な思いがお寺の誓願となり、布教区・支庁でまとめて宗門の誓願となるのです。故に本門佛立宗のご弘通は、現場の第一線に立つ一人ひとりの佛立菩薩の「やる氣」が左右することを幹部や役中信徒はよく理解し、担当するご信者がやる氣になるよう、積極的に声を掛けよと仰せです。これはご弘通の核心です。「法は人に依って弘まる」で、様々な方策やグッズは、弘通の人を助ける手段に過ぎません。そこをよく心得、カラ元氣でも結構です。「話してみよう」「挑戦しよう」と氣持ちを後押しする声を掛けるのが「ご弘通のリーダー」の幹部・役中の大事なご奉公であると念を押されたのです。

▼科学の力よりも、御題目さまの方が有難いんだという心構えをしっかり掴んで、子供さんたちにも植え付けておかねばなりません。「世の中がどんなに変化しても、絶対に大丈夫だ」という信念と、「最後まで忘れてはならないのは報恩教化だ」ということ、これを自覚して、真のご奉公をして欲しい……最先端の科学技術を以ても、救えない命や叶わない夢、避けられない不運があります。科学の恩恵を受けることは素晴らしく、科学的な判断が間違いを犯すリスクを下げるのは当然です。しかし、そんな人類の叡智を自身の幸福に活かせるか否かは、運不運に左右されるのが現実でもあります。御題目口唱の力は、そんな一寸先は闇の凡夫を幸福な未来へと導き、現証を以て護ります。更に言えば妙法の現証は、時に現代科学でも説明がつかない不思議な結果を現します。これが時代や国を越えて、多くの人が支えとしてきた理由です。ですから、未来ある子どもたちに自信を持って、ご信心の大事を教えよと仰せです。困難なときほど眞価を発揮する御題目をお持ちすれば、きっと将来、子どもたちは頑張って相続したご信心に救われるはず。そんな「良き人生を歩む宝」をお祖師さまから授かるお互いだからこそ、その歡びを多くの人に伝える報恩教化を忘れてはならないのです。

▼また、財の功德を積むこと。本山中心信仰、御初灯明料などを、分相応以上に氣張って功德を積むことに努力して欲しい。本山は欲張っているわけではありません。「皆さんに少しでも大きな功德を積んでもらいたい」と念じているからだ。知っていただきたいのです……経済が回らないと、途端に生活は傾きます。災害等で経済が止まれば、バラ色の人生もどん底に転落します。財はそれほど社会の土台として、存在感を持つのが現代です。ならば財の果報が増すよう、財の功德を積むのは幸福を得る基本。そこで、「いたずらに欲にお金を費やさず、御法のために使って徳を積むことを覚えて欲しい」と仰せなのです。言いにくいお金の話を厳しく勧めて、多くの人をご利益の世界へと導かれた石岡上人の、締めのお言葉です。

【御教歌】 一組の長なる人は其組の をこたりせむる役めなりけり